Francis Scott Fitzgerald
The Great Gatsby について

永井　　衷

I

There'd be an orchestra
　　Bingo! Bango!
Playing for us
　　To dance the tango,
And people would clap
　　When we arose,
At her sweet face
　　And my new clothes 註(1)

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) は，「戰爭の世代(ウオア・ジエネレーション)」に屬する作家の一人である。冒頭に引用したのは，彼の *For A Long Illness* という詩の一節であるが，盛大な舞踏會や，そこにひしめく若い男女は，彼が好んで描いた題材の一つであつた。後年，カレッヂに在つたその娘 Lenahan に宛てた手紙の中で述べているように，註(2) 彼の作品は自傳的であり，その背景となつているのは「二〇年代」の所謂「ヂャズ時代」であつた。大戰直後のアメリカの繁榮が必然的にもたらした，一種の頽廢した世相を描いた點では，彼に比肩しうる作家はないのであり，その意味で彼こそ「二〇年代」の旗手であつたといえよう。

そういう彼は，處女作 *This Side of Paradise* (1920) によつて，彗星の如くアメリカ文壇に登場し，瞬時にして流行作家の列につらなつてしまつた。そして自己を 'cracked plate' と感じながら，未完の大作 *The Last Tycoon* を殘して四十四歳の若さで悲劇的な生涯を終えるまで，實に百六〇篇の長短篇を書き殘した。

小說の量が作家の價値を決定するものでのないことは言を俟たない。殊に彼のように，單に社會の皮相的な面のみを取り上げることに急で，その背後に明確な主張を持たない作家にあつては，時には，シーリアスな作家であるか否かを疑はれる弱點をもつけれども，彼の波亂にみちた生涯は，此の作家としての缺陷を補つて餘りあるものがあるといえよう。Amory と共に 'Paradise' の夢を追い，Anthony や Gatsby と共に其の夢の悲しさを味い，Nick や Dick と共にその夢の背後にひそむ不安と恐怖に戰かねばならなかつた Fitzgesald 自身が，まさに時代の象徵であつたと云えるのである。そのような彼の作品に於ける興味はこのような，特殊な時代を背景として織りなされた歷史と人間の繪模樣であると云はねばならぬ。そして，彼の沒後既に十幾年の歲月が流れ去つた現在，此の時代の距離は，彼の姿を我々に一層明確なものとして與えてくれるのである。最近アメリカに於て，彼に對する最評價の聲が屢〻聞かれるのも，矢張り彼が Hemingway や Doss Passos と共に，'Lost Generation' を代表する作家であると考えられるからに外ならない。

The Great Gatsby (1925) はそういう彼の特色をうかがう上から，最も注目すべきものであり，藝術的にも彼の作品系列の中で最も高い成果をあげたものと考えられよう。

The Great Gatsby の舞臺となつているのはニュー・ヨークとロング・

アイランドを中心とした一帶である。そしてこの物語が始る時には，主人公 Jay Gatsby は，この海濱の一角にそゝりたつ豪奢な邸宅に住んでいる。そこでは，夜毎昔日の王候の生活を偲ばせるような，夢幻的な生活がくりひろげられている。そのパーティーにはニュー・ヨークから種種雜多の人間が集つてくるのだが，週末ともなればその喧燥は頂點に達するのが常であつた。彼の乘用車の Rolly Royce はオムニバスとかわつて，朝八時から夜半まで，ニュー・ヨークとの間を往復しつゞけねばならなかつた。月曜になれば七人の使丁に，更に臨時の庭師を加えても會場の後始末は容易でない程の豪勢さである。そして又このパーティーのために，ニュー・ヨークから五籃のオレンヂやレモンがとゞけられ，その屑は月曜の朝には臺所の裏でピラミッドを築くのであつた。Fitzgerald はその盛大なパーティーを，彼一流の華麗な筆で次のように述べている。

By seven o'clock the orchestra has arrived, no thin five-piece affair, but a whole p'tful of oboes and trombones and saxophones and viols and cornet and piccolos, and low and high drums.····· the cars from New York are parked five deep in the drive, and already the halls and salons and verandas are gaudy with primary colors, and hair bobbed in strange new ways, and shawls beyond the dream of Castile. The bar is in full swing, and floating rounds of cocktails permeate the garden outside, until the air is alive with chatter and laughter, and casual innuendo and introductions forgotten on the spot, and enthusiastic meetings between women who never knew each other's names.

The lights grow brighter as the earth lurches away from the sun, and now the orchestra is playing yellow cocktail music, and the

opera of voices pitches a key higher.……The groups change more swiftly, swell with new arrivals, dissolve and form in the same breath; already there are wanderers, confident girls who weave here and there among the stouter and more stable, become for a sharp, joyous moment the centre of a group, and then, excited with triumph, glide on through the sea-change of faces and voices and color under the constantly changing light. 註(3)

人々はこのような Gatsby を「ドイツのスパイ」とうわさし，「ドイツ皇帝 Kaiser Wilhelm の一族」と取沙汰し，或は「殺人犯」の疑惑の眼をもつてみるのだが，物語が相當進行するまでは，この不思議な人物については何一つ讀者にはわからないのである。そして Gatsby 自身も又，自分の過去については何人にも語つたことはなかつた。

Gatsbyは「中西部(ミドル・ウエスト)」の下層の農夫の息子として生れたのだが，野望に燃えた一種の風雲兒であつた。大學も完全に終えないで，彼は偶々勃發した大戰に從軍すべく 'Camp Taylor' に入隊して，その間 Daisy と呼ぶ女性と相識るにいたるのである。けれども彼が陸軍大尉として Argonne の戰鬪に參加し，やがて休戰を迎えて Oxford に學ぶ中に Daisy は Chicago の富有な青年 Tom Bachnan と平凡に結婚してしまつた。

かくして自己の經濟的無力さと，戰爭によつて，愛するものを奪われた復員將校 Jay Gatsby の戀人奪還の生活が始ることになつた。そのような彼にあつて當面する問題は「富(マネー)」であり，富の力をもつてすれば，失われた自分の青春も，戀も奪い還せると考えたのである。そして既に彼は「酒類密賣人(ブートレガー)」となつて巨萬の富を築き上げて，今は彼の邸宅の對岸に移り住んでいる Daisy との再會を待つている。遙かに海をへだてた對岸に，夜毎明滅する Daisy の「綠の燈火」をみるにつけても，傷心の Gatsby の

胸は痛んだ。そして靜に獲物をまつ蜘蛛のように，いつかは Daisy が彼の眼前に現れることを信じつゝ待つている。

Daisy をかつての戀人のところへ走らせたものは，精神的ボヘミアンである夫 Tom との間の生活の倦怠であり，Tom の不行跡であつたと云えよう。彼らは再會し，こゝに Gatsby の念願は達せられるかに見えるのだが，それ以上を語るを要しないあわたゞしい終局が二人の間を永遠に引き離してしまうことになる。ニュー・ヨークからの歸途，疾走する Gatsby と Daisy の車は運惡く路上の一婦人を轢殺してしまつた。皮肉にも被害者は Tom のミストレスであり，やがて Gatsby はその夫によつて射殺されてしまうことになる。

以上この物語の主人公 Gatsby の悲劇を概觀したのであるが，僅か三ケ月の事件を語るにあたつて，作者は屢〻フラッシュ・バックの手法によつて，無數のエピソードを補足的に附加しつゝストーリーを展開させてゆく。而も緊密な構成の下に，讀者を息もつかせぬまで引きつけてゆく點でこの作家にあつては他に類をみない傑作であると云えよう。

註(1) *The Crack-Up* by F. Scott Fitzgerald, 1945, New Directions, New York.

(2) "When I was your age I lived with a great dream. The dream grew and I learned how to speak of it and to make people listen."

(3) *The Great Gatsby* by F. Scott Fitzgerald, 1951, Charles Scribner's Sons, New York.

II

Fitzgerald の作品が自傳的であることについては先にふれたが，*Gatsby* 註(1) も彼の傳記を回想することによつて，一層明瞭な姿をもつて我々に迫るのである。其の意味で，此の Gatsby という復員軍人の不幸な戀愛を考える

前に，我々は作者 Fitzgerald 自身の戀のロマンスをふり返つてみる必要がある。

彼は Princenton 大學在學中に，特別試驗に合格し，陸軍中尉の階級で Alabama のキャムプに入隊した。そこで彼は，休日には小說を書きながら暮したと傳えられているが，其の間後年彼の妻となつた Zelda と相識るに至つた。Zelda は，彼が友人達に "the most beautiful girl in Alabama and Georgia" と誇らしげに書き送つた程，すぐれて美しい女性であつた。二人の間にはやがて婚約が成立する程になつたのであるが，彼が除隊後，突然 Zelda の方から破談してしまつた。理由は彼が經濟的に無力であつた點があげられているようだが，此の點 Gatsby と Daisy の場合と同樣である。富と美貌を併せもつた Daisy にめぐりあいながらも，自己の無力を歎ぜざるを得なかつた Gatsby の立場は，そのまゝ Fitzgerald に通ずるものであつた。

However glorious might be his future as Jay Gatsby, He was at present a penniless young man without a past, and at any moment the invisible cloak of his uniform might slip from his shoulders.
註（2）

Fitzgerald は戀を失つた苦痛を忘れようとして，友人から借金して，三週間というものはニュー・ヨークの街を飲み歩いたという。そういう彼は，やがて鄕里の St. Paul へ歸ることになるのだが，そこで一度は Scribner's から斷わられた作品を再び一卷の小說にもとめあげた。

This Side of Paradise である。これが同社から認められて，書物としての姿をとつたのが一九二〇年で，忽ち異常な人氣を呼んで，彼は文壇に浮び上る幸運を摑んだのであつた。

當時漸く活潑な動きをみせはじめたアメリカの出版ヂャーナリズムが，こうした彼を放置する筈はなかつた。大小の雜誌社が競つて彼の作品を求

めだした。一九一九年には，僅か八七九ドルであつた彼の收入は，翌年には一八八五〇ドルと，大きく飛躍した。そして此の年の早春には，Zelda が再びニュー・ヨークの彼の下へ姿を現し，二人は St. Patrick's Cathedral で華燭の典をあげることになつた。のみならず，彼の作品は其の後も洛陽の紙價を高めて，その榮光に一段と光彩をそえたのであつた。

少年時代の Fitzgerald の憧れは，フットボールの花形選手であつたがその夢はやがて，'big man in college', 'hero on the battlefield' とかわつていつた。「戰場の英雄」とはなり得なかつたのだが，「戀の英雄」となつたわけである。そして Fitzgerald にあつては，此の「夢」と，その實現の爲に支拂われた異常な情熱が，彼の文學活動の源泉となつていると云えるのである。それは彼の 'Paradise' であり，同時に此の國の「二〇年代」の空前の經濟的繁榮のもたらした夢に通ずるものであつた。特に *Gatsby* が世に出た一九二四年は，世をあげて「クーリッヂ景氣」を謳歌した時代でもあつた。極度に機械化された產業は，大量生產と高賃金の理論と實際との成功に基いて，世界市場へ大きく飛躍した。しかしながら，此のアメリカ經濟の飛躍的發展は，反面此の國の社會に對して著しい變革を與えたのであるが，それは日常生活に於ける風俗の混亂となつて現れた。戰後の絕望感も加わつて，一種の頽廢した空氣がこの混亂を一層複雜にした。例えば禁酒法が制定されはしたものゝ，逆に此の法令によつて飲酒の風習は亂れた觀さえあつた。人々はポケットに壜をしのばせ，ダンスの際に飲酒する習慣がひろまり，路上で前後不覺になる者が增加することになつたのである。Gatsby のようなブート・レガーが暗躍し，ヂャズの喧噪は巷にみちみちた。

Fitzgerald の作品は，こうした「ジャズ時代」の理念を一般化したものであることは既にふれたが，*Gatsby* についても充分このことが考えられる

のである。そして我々は上に述べてきたような，彼の傳記を回想する時，主人公 Gatsby に投影する作者や，其の時代の影を思はざるを得ないのである。「中西部」のしがない農夫の息子 Jim Gantz が，失戀の苦痛にも負けず，苦闘幾年かの後に，巨大な富をきずきあげることに成功し，その富の力によつて自分の幸福をもあがない得ると過信するあたり，ここにも我々は Fitzgerald の 'Paradise' の夢をみるのである。

けれども *Gatsby* に於ける作者の主張をこのような單純な 'Paradise' の主張に限定して考へることは甚だ危險であるといわねばならない。Gatsby に對する作者の態度は，終始同情と憐憫にみちていることは確かであるが，同時に此の作品を貫いている作者のアイロニーを見逃すことはできないのである。*This Side of Paradise* を基底とする彼の初期の作品が，作者の 'Paradise' の追求であるとするなら，*Gatsby* は Fitzgerald の 'Paradise' えの訣別を示すものと解すべきであろう。

我々は次に，このような角度から此の作品を檢討しつつ，その間の關係を明かにしてみたいと思う。

註(1) *The Great Gatsby* 以下 *Gatsby* の略稱を用いる。

(2) *The Great Gatsby* by F. Scott Fitzgerald, 1951, Charles Scribner's New York.

III

此の物語の中で，主人公 Gatsby 以上に重要な役割を果しているのは，Nick Carraway であると云えよう。彼は narrator であり，物語の進行解説の役割を果しながら，同時に此の事件の批評家をも兼ねている。從つて物語全體が，Nick-Fitzgerald の感情と判斷に依つて全體の統一を保つ點で，作品構成の方法の上でも，過去のそれに對して一線を劃している。

例えば Gatsby と Daisy との再會のシーンにしても，それは單なる敍述ではなく，Nick の主觀を通して說明されるわけである。

(Daisy) turned her head as there was a light dign'fied knocking at the front door. I went out and opened it. Gatsby, pale as death, with his hands plunged like weights in his coat pockets, was standing in a puddle of water glaring tragically into my eyes.[註(1)]

此の Nick も又「中西部の」出身であるが，大戰後の西部の生活に幻滅を感じて，新しい生活の夢を求めて東部に移つて來た復員軍人でもある。'a real Easterner' をその理想としている Nick ではあるが，彼のモラルの規準となつているのは「中西部」のそれである。そして彼の興味ある性格の特色の一つは，人間生活の物質的な面——それは「富」という言葉で表はれるのだが——に異常な關心を持つていることである。この點は Gatsby にも共通するのだが，同樣に，このことはミネソタ生れの作者自身にも云えることは先にも述べた通りである。

Nick が始めて East Egg の Daisy の家を訪れた時，先ず彼の心を捉へたのは，その住居の立派で美しいことであつた。此の美しさ——bright, rosy colored space——は，そこでとり交されるソフィスティカルな會話と共に，「中西部」の田舍から出て來た Nick をすつかり當惑させてしまうのであつた。

"'You make me full uncivilized, Daisy.' I (Nick) confessed—'Can't you talk about crop or something?'"[註(2)]

此のような「富」によつて支へられる豪華な生活に對する畏敬の念は，Gatsby が最初に Louisville の Daisy の家を訪問した時の驚きにもつながるものと云えよう。

……he had never been in such a beautiful house before. But

what gave it an air of breathless intesity was that Daisy lived there—it was as casual a thing to her as his tent out at camp was to him. There was a ripe mystery about it, a hint of bedrooms, of gay and radiant activities taking place through its corridors, and of romances that were not musty and laid away already in lavender but fresh and breathing and redolent of this year's shining motor-cars and of dances whose flowers were scarcely withered. 註(3)

そして，此の「富」への關心は，人間の聲の中にすら 'money' と感じる程に強く彼等の心（從つて作者をも）をとらえていたのであつた。

"She's got an indiscreet voice." I (Nick) remarked. "It's full of"—I hesitated. "It's full of money." Gatsby said. 註(4)

けれどもNick はGatsbyと違つて,「富」を憬れ望みつつも，その反面にはたえず明確な批評意識が働いている。少くとも彼にとつて，自分は Carraway 家の一員であるというほほえましい自負心があつたのだ。（in the Carraway house in a city where dwellings are still called through decades by a family's name）先に引用した「何か農作物の話でもして呉れないか。」という歎聲と共に Fitzgerald らしい面白い説明のし方であろう。そして此の Nick の批評意識は，彼が Daisy を訪ねた時，彼女から夫との不仲を物語られた時のアイロニーの中にも強烈に匂つている。

The instant her voice broke off, ceasing to compel my attention, my belief, I felt the basic insincerity of what she had said. It made me uneasy, as though the whole evening had been a trick of some sort to exact a contributary emotion from me. 註(5)

此のような Nick においては，最後には Gatsby の立場は，Daisy や

Tom をも含めて，否定されてしまうことになる。所詮 Nick にとつて，彼等の生活は何の共感も呼び起さないばかりか，云いしれない嫌悪の氣持さえ引き起させるに至るのである。彼が最後には Gatsby に對して激しい言葉をなげつけるのをみてもわかるのだが，Gatsby の死後 Fifth Avenue で Tom と出逢つた時の彼の氣持は此の事をよく表はしているといえよう。

I couldn't forgive him or like him, but I saw what he had done was, to him, entirely justified. It was all very careless and confused. They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made……

I shook hands with him; it seemed silly not to, for I felt sudenly as if I were talking to a child. Then he went into the jewelry store to buy a pearl necklace—or perhaps only a pair of cuff buttons—rid of my provincial squeamishness forever. 註(6)

そして，此の Nick の Tom に對するアイロニーの最後に續く "string of pearls valued at three hundred and fifty thousand dollars" は先にもふれた通り，*Gatsby* に於ける作者のアイロニーの要約と考へてよかろう。

Nick が「富」の背後にみたものは愚しさ，空しさの外の何物でもなかつた。Gatsby が追求した「富」やその上に支へられた彼自身や，又Tom の生活も，最早 Nick にとつては何の魅力でもなかつた。そしてそういう生活の背景となつた East そのものまでが，Nick にとつては，El Greco の夜景によつて象徴される罪の世界としかうつらなかつたのである。

……In the foreground four solemn men in dress suits are walking along the sidewalk with a stretcher on which lies a drunken woman in a white evening dress. Her hand, which dangles over the side, sparkles cold with jewels. Gravely the men turn in at a house—the wrong house. But no one knows the woman's name, and no one cares. 註(7)

Gatsby の死後，Nick は期待していた East の生活の底に流れる醜悪さに失望して，再び西部の故郷に歸ることになるのだが，そういう彼の腦裏をかすめるのは少年時代のクリスマス休暇の新鮮なイメジだつた。

歸郷の途中の車中での胸のときめき。氷つた闇の中になる橇の鈴の音。窓邊の燈火や，氷つた雪の上になげかけられたクリスマスの飾りつけ。そしてよく考へてみれば彼自身も又その一部であつたことに氣づくのであつた。

註(1) *The Great Gatiby* by F. Scott Fitzgerald, 1951, Charles Scribner's Sons, New York.

(2) Ibid..

(3) Ibid..

(4) Ibid..

(5) Ibid..

(6) Ibid..

(7) Ibid..

Ⅲ

Gatsby は或意味に於て二〇年代のアメリカの偉大な夢に對する，作者のパロディーと考えることができよう，壯麗なパーティーにとりかこまれ

奇妙なピンクの服をまとい，自らが組立てた虚偽に充ちた傳説の中に住むことに依つて，社會的な指彈をまぬがれた此の青年は「二〇年代の英雄」であり，その意味で一つの「アメリカの悲劇」を象徴するものであるとも云えよう。Gatsby の死後，彼が少年時代に使用した手帳が發見されるのだが，それには次のような一節が記されていた。

Rise from bed····6.00 A. M.····Dumbbell exercise····

6.15-6.30····Study electricity, etc.····work····

Baseball and sports·····Practice elocution, poise and how to attain it····Study needed inventions

GENERAL RESOLVES

No wasting time at Shafters or (a name, indecipherable)

No more smoking or chewing

Bath every other day

Read one improving book or magazine per week

Save $5.00 (crossed out) $3.00 per week

Be better to parents 註(1)

Fitzgerald が *Gatsby* について，友人の一人に宛てた手紙をみても，此の手記の一節が，Gatsdy の素朴な野心に實にそぐわしいものであることを知るのである。

"He was perhaps created in the image of some forgotten farm type of Minnesota that I have known and forgotten, and associated at the same moment with some sense of romance····· a story of mine, called 'Absolution' ···· was intended to be a picture of his early life, but I cut it because I preferred to preserve the sense of mystey."

そして Gatsby がミネソタあたりの，單純な‘farm type’の青年として描かれた限りに於て，彼は偉大であり，その死は牧歌的な悲劇に彩られているものと解せよう。けれども，彼が自分の偉大さに眞に氣づくことなく，自己を過信し，餘りにも盲目的に Daisy を愛したことは，愚かでもあり，又不幸であつたと云わねばなるまい。とまれ Fitzgerald は此の物語の最後を次のような感動にみちた言葉で結んでいる。

Gatsby believed in the green light, the orgiastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter ——to-morrow we will run faster, stretch out our arms farther···· And one fine morning——

So we beat on, boats against the current, borne back seaselessly into the past. 註(3)

Fitzgerald も又‘green light’を信じ，Gatsby を，Daisy や Tom をも信じたのだ。從つて，其の何れをも否定せざるを得ないのである。このことは *Gatsby* の大きな特色であつて，*This Side of Paradise* 以來，此の作家が追求した‘Paradise’の幻影が既にその腦裏を離れたことを我々は知るのである。*The Beautiful and Damned* (1922) によつてはじめて‘Paradise’への幻滅を味はつた Fitzgerald は，*Gatsby* に於て完全に‘Paradise’への夢を放棄するのである。*Gatsby* が Fitzgerald の‘Paradise’の主張でありながら，同時にその訣別であると云つた所以である。

It occurred to me (Nick) that there was no difference between men, in intelligence or race, so profound as the difference betwen the sick and well. 註(4)

此の Nick の感懷は同時に Fitzgerald 自身のそれでもあつた。*Gatsby*

の後に出る *Tender is the Night* に至る九年間は，彼にとつて此の不吉な直觀を身を以て驗す苦々しき歳月であつた。彼自身は勿論，時代そのものが，既に衰退期に向つて大きく動き出していたのである。彼の經濟狀態は決して安定したものではなく，加へて Zelda が病床に倒れてしまう不運に見舞はれることになる。他方また彼自身も，自分の名聲が次第に衰えてゆくことを意識して惱み續けねばならなかつた。最早そこには‘Paradise’の夢は殘されてはいない。殘されたのは不安と恐怖のみであつた。彼の飲酒は次第にその量を增し，酒亂に近い狀態に身を沈めてゆく。そして終には，自らを「ひびわれた皿」と感じねばならない晩年を迎えることになるのである。

註(1) *The Great Gatsby* by F. Scott Fitzgerald, 1951, Charles Scribner's Sons, New York.

(2) Ibid..

(3) Ibid..